

自閉症スペクトラム児の療育プログラム開発における 発達の視点と工夫（1）

幼児期～小学校中学年期：進行固定プログラムの柔軟化

Developmental perspective and ingenuity in developing the program of treatment and education for children with autism spectrum disorders.1:

Early childhood-Middle grades of primary school: Modify the fixed program to a flexible one

○春日彩花¹・藤戸麻美^{2#}・松本梨沙^{1#}・安田祥子^{1#}・小島拓^{1#}・富井奈菜実¹

荒木美知子⁴・竹内謙彰³・荒木穂積³

○KASUGA Ayaka¹, FUJITO Mami^{2#}, MATSUMOTO Risa^{1#}, YASUDA Shoko^{1#}, KOJIMA Taku^{1#},
TOMII Nanami¹, ARAKI Michiko⁴, TAKEUCHI Yoshiaki³, ARAKI Hozumi³

(¹立命館大学応用人間科学研究科・²同大学文学研究科・³同大学産業社会学部・⁴大阪女子短大)

(^{1,2,3}Ritsumeikan University, ⁴OsakaWJC)

Key words: 自閉症スペクトラム児，療育，プログラムの柔軟化

発達段階の異なる自閉症スペクトラム児が、見立てとごっこ遊びに取り組み、集団で活動するための療育プログラムを提案する。本研究ではC1を中心に、約1年半（2012年6月～2013年10月）の活動を概観し、子どもが気持ちを立てなおす過程と、個人と集団の側面から、プログラムの見なおしを検討する。

方法

参加児 2012年6月から2013年9月の間、療育プログラムに参加した1名（C1）を対象とした。また、C1とともに療育プログラムに参加する子どもも含め、学年および診断時期などの詳細を表1に示す。

表1 参加児の属性（2012年度時点）

事例	学年	診断時期	学級・学校	本療育加入時期
C1	小2	4歳0か月	通常学級	2010年11月
C2	小3	3歳8か月	特別支援学級	2010年7月
C3	小2	7歳2か月	通常学級	2011年11月
C4	小2	未診断	通常学級	2009年4月
C5	小1	3歳5か月	通常学級	2009年4月
C6	年中	3歳2か月	幼稚園+療育センター	2011年9月

注：C5は2012年11月まで参加していた。参加児は全員男児である。

手続き 療育プログラムは月1回、120分の活動であった。参加児の学年や遊びの段階を考慮しながら、個人の遊びと集団の遊びを取り入れた「設定遊び」を計画し実施した。分析には参加児の活動記録、療育場面を撮影した映像データを使用し、プログラムの質的な変化を参加児C1の反応と対応させながら考察した。

結果と考察

本研究における調査期間を、進行固定期、模索期、選択・「複線」期、個人・集団両立期に分けて考察した。なお、進行固定期は2012年7月まで、模索期は2012年10月まで、選択・「複線」期は2013年2月まで、個人・集団両立期は2013年9月までとした。

進行固定期 段階を追って、全員が同じことを実施するプログラムを設定していた時期であった。紙芝居を用いてプログラムの流れを詳細に説明し、大道具を用いた設定遊びを取り入れていた。ゆえに、他の遊びに急遽変更

することが困難であり、子どもたちにとって選択肢が少ないプログラムであったと考えられる。C1は、プログラムの流れを変更させるために、紙芝居を破ったり、プログラムを実施したいC5と衝突したりすることもあった。自分の意見が聞き入れられなかった際には、他児の作品やスタッフの準備したものを破壊するような行動もみられた。その結果、別室での個別対応を行ったが、C1は「戻りたい」と言うなど、他児とともに活動することを望んでいた様子が見られた。

模索期 進行を固定せず、枠組みのないプログラムを実施した時期であった。紙芝居を廃止し、子どもたちの意見を聞いて活動に反映するなど、選択の機会を設けた。それによって、スタッフが想定していなかったC1の提案を、受け入れて実現することが可能になった。C1は積極的に活動に参加し、C4とともに火事に見立てた的に向けて水鉄砲を撃つなど、他児と同じ場面を共有することができた。

選択・「複線」期 子どもたちによる選択の機会を残しながら、一定の枠組みを再度設けた時期であった。また、全員同じ場所で遊びこむことを目標として、設定された遊びに興味を持てなかった子どもや進行速度の速い子どものために、メインのプログラムとは別に「複線」を設けた。C1は、メインのプログラムを拒否する様子を見せることもあったが、スタッフが「何を作りたい？」とたずねると、自分の作りたいものを答え、他児と同じ素材や道具を用いて工作を行うことができた。また、進行速度が他児よりも速かった場合には、作ったものを取り入れたごっこ遊びをスタッフが促したこともあり、C1は最後まで集団から離れることなく活動に参加できた。

個人・集団両立期 全員が同じ場所で活動できるよう配慮するだけでなく、子ども同士の関わり合いを手助けしている時期である。模索期、選択・「複線」期を経て、C1は集団から離れることなく活動に参加し、自ら設定したごっこ遊びに他児を誘うなど、積極的に他児とかかわっていく様子が見られるようになった。スタッフが子どもの自主性を尊重することで子どものペースが保たれ、気持ちが安定し、子ども同士の相互作用が促進されたと推察する。